

## [特別支援教育]

# 筆圧をコントロールし、「はね」「はらい」を改善するための書字指導 －筆圧が強い児童に対する水書用筆を使用した実践－

小川 美里\*

## 1 主題設定の理由

小学校学習指導要領解説国語編(2017)では、「点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。」と示されている。この中でも、点画の書き方を全体指導の中で確実に書かせることの難しさを感じることも多かった。筆者自身の書写の授業を振り返ると、通常学級の指導においては、全体に筆順や終筆(とめ・はね・はらい)、文字の形を指導したり、児童に考えさせたりした後、一人一人の実態に合わせて個別に指導してきた。全体指導だけでは、終筆のはね・はらいを正確に書くことができない児童が中にはいたが、個別に対応すると書けるようになった。「すうと書いてごらん。」「力を抜くといいよ。」などと個々に声を掛けたり、見本を提示したりすることで確実に書くことができるようになったため、個別指導の重要性を感じた。

しかし、昨年担任した特別支援学級の2年生の児童は、筆圧がとても強く、常に力を入れている状態で書字していた。はね・はらいのある文字でも、最後まで力を入れて書いているため、はね・はらいができず、とめになってしまう。今までのように、個別に声を掛けたり、手本を示したりしても改善は難しかった。

小学校学習指導要領解説国語編(2017)では、「水書用筆等を使用した運筆指導を取り入れるなど、早い段階から硬筆書写の能力を高めるための関連的な指導を工夫することが望ましい。」とし、低学年における適切な運筆能力の向上につながる指導の工夫が必要であることが示されている。また、小林ら(2016)は、「弾力と緩衝的機能との特性を持つ学習用筆記具を使用したことが、運動的な面として終筆部の『払い』『止め』の学習に効果をもたらし、点画要素として取り上げて書いた『はね』においても同様の傾向が見受けられると推察できる。」<sup>1)</sup>とし、緩衝的機能を持つ学習用筆記具の使用は硬筆学習に有効であることを明らかにした。

そこで、筆圧が強い児童が水書用筆を使用することで筆圧をコントロールし、「はね」「はらい」の改善につながらないかと考え、本研究を行うこととした。児童の書字の課題である筆圧の強さの改善に向けて、水書用筆を効果的に活用する。これにより、筆圧のコントロールを図り、終筆の改善にもつなげたいと考え、本研究を行うこととした。

## 2 研究の目的

本研究では、筆圧が強い児童において、水書用筆を効果的に使用した書字指導を行う。その際、文字指導の系統性を考慮し、学習内容を設定する。これにより、筆圧をコントロールし、「はね」「はらい」の改善に効果があるか検証する。

## 3 研究内容と研究方法

### (1) 研究内容

#### ① 適切な学習内容の配列

一度にはね・はらいを学習するのではなく、スモールステップで一つずつ学習を進める。教科書<sup>2)</sup>には、「くつ」「ことり」「かさ」の順序で掲載されていることから、「はらい」を先に学習し、「はね」を後に学習することとする。

#### ② 水書用筆の効果を上げるカリキュラム・マネジメント

1日1回、書写の時間以外の国語の時間に5～10分程度水書用筆を使用し、はね・はらい、直線や波線などを太く書いたり細く書いたりする練習を行う。また、授業で書字をする場面では、書写の時間に習ったことを思い出せるように声掛けを行う。

\*三条市立保内小学校

## (2) 研究方法

### ① 対象となる児童

特別支援学級に在籍する2年生の児童1名。児童は、1学年時に平仮名や片仮名を習得している。漢字は、1学年時で習う半分の40字程度を学習している。漢字練習をする際は、新出漢字を学習することや書字することを楽しそうな様子が見られ漢字ドリルを意欲的に進めている。しかし、常に力が入っている状態のため、書字を続けると「疲れた。」と言って休憩することがある。筆圧がとて強く、常に力を入れている状態で書字しているため、はね・はらいのある文字でも、はね・はらいができず、とめになってしまう。個別に声を掛けたり、手本を提示したりしても改善は難しかった。また、クーピーや尖った鉛筆の芯をよく折ってしまう。書字以外の活動でも、友達にボールを渡すときに力が入ったり、手で紙を上手く切れなかったりなど、普段から力をコントロールすることが容易にできない。

### ② 授業での児童の様子の見取り

はね・はらいを正しく書いているかを観察する。(ワークシート)

### ③ 定期的な調査用紙による筆圧調整の検証

カーボン紙と普通用紙を交互に重ねた調査用紙にいくつかの文字を書字し、筆圧が変化したかを定期的に記録する<sup>3)</sup>。また、調査用紙に書字した文字を見て、はね・はらいができたかを記録する。本実践前、実践終了後、実践1ヶ月後の3回の書字の記録を比較し、筆圧の変化、はね・はらいの出来栄を検証する。

## 4 実践の概要

### (1) 単元名 「はね・はらいのめいじんになろう」

### (2) 実施対象及び実施期間

#### ① 実施対象 小学校2年生

#### ② 実施期間 令和5年9月・10月（授業後、1か月間1日5～10分程度水書用筆を使用して練習する）

### (3) 指導計画（全7時間）

教科書の一覧<sup>4)</sup>を見て調べた結果、平仮名や片仮名、1学年の漢字の中ではらいが含まれている文字は、左下へのはらい（つ、ラなど）、右上へのはらい（し、ンなど）、左はらい・右はらい（大、八など）、その他（む、ゆなど）に分けることができる。はねが含まれている文字は、左上へのはね（か、オ、小など）、真上へのはね（見、先など）、右上へのはね（い、はなど）、その他（き、らなど）に分けることができる。以上のことから、単元を以下のように計画した。

時	主な学習活動
1	・左下にはらう平仮名や片仮名を書く。（つ、ラなど）
2	・右上にはらう平仮名や片仮名を書く。（ン、しなど）
3	・左はらい、右はらいのある漢字を書く。（大、八など）
4	・左上のはねる平仮名や片仮名、漢字を書く。（か、オ、小など）
5	・真上にはねる漢字を書く。（見、先など）
6	・右上にはねる平仮名を書く。（い、はなど）
7	・はらいやはねがある平仮名や片仮名、漢字を書く。 （今までに習った文字の復習、それ以外の「む」「き」などの文字）

### (4) 毎時間の学習の展開

児童が見通しをもち、落ち着いて学習に取り組めるように、以下の「毎時間の学習の展開」を授業の流れとして取り組んだ。

	学習内容
導入	○水書用筆で直線や波線、グルグルなどを書く。
展開	○教師がその場で書いた適切なはらいと適切でないはらい（とめ）の毛筆の文字を比較する。 （※はねの授業では、適切なはねと適切でないはね（とめ）を比較する。）

展開	<p>○教師が提示した文字を練習する。</p> <p>① 空書や指書きをする。</p> <p>② 水書用筆で書く。</p> <p>③ 鉛筆で書く。</p> <p>(はらいは「すう」、はねは「ピョン」、とめは「ぴた」と声に出しながら練習する。)</p> <p>(鉛筆で上手く書けないときは、水書用筆に戻って練習する。)</p> <p>○教師が提示したいくつかの文字の中から、児童が書きたい文字を選び、練習する。</p> <p>① 空書や指書きをする。</p> <p>② 水書用筆で書く。</p> <p>③ 鉛筆で書く。</p> <p>(鉛筆で上手く書けないときは、水書用筆に戻って練習する。)</p>
終末	<p>○まとめをする。</p> <p>○振り返りをする。</p>

### (5) 授業の実際

#### ① 1時間目

1時間目は、左下にはらう文字を練習した。水書用筆で練習したあとに、硬筆での練習を行った。硬筆での練習では、どの文字も力を入れて書いている様子が見られ、文字全体が濃く書かれていた。

導入では、教師が提示した直線や波線などを見ながら、児童は水書用筆の穂先を全て水書用紙にあてて力を入れて書いた。太い線しか書けなかったため、提示したお手本を見せながら「細い線で書ける？」と声を掛けたが、細く書くことはできなかった。次に、教師が提示した「つ」の練習をした。教師が習字で書いたはらいの「つ」ととめの「つ」を見比べ、「どっちが正しい？」と聞くと「こっち（はらいのある方）。」と答えることができた。「(終筆が) となるといいかな？」と質問すると「三角。」と児童は答えた。「はらうところは、すうと書くと三角になるよ。」と教え、練習に取り組んだ。「はらうところは、すうだね。」と声を掛け、児童と一緒に声に出しながら練習した。水書用筆で何度か練習するとはらうことができた。硬筆の練習では、1文字目からはらうことはできたが、枠からはみ出し、字形が崩れた文字になった(図1)。「次は、線(枠)の中を書けるといいね。」と声を掛けると、枠からはみ出さなかったが、



写真1 水書用筆を使用して練習している様子

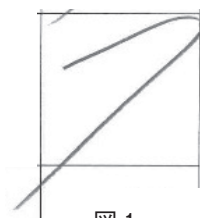


図1

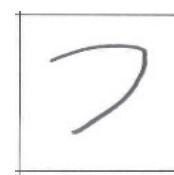


図2



図3

はらいができなかった(図2)。児童が選択した「あ」では、左下にはらうことができず、右下へのはらいとなった(図3)。

#### ② 2時間目

2時間目は、右上にはらう文字を練習した。どの文字も、文字全体が濃く書かれていた。

導入の水書用筆での練習では、お手本を見て自分で区別しながら太い線と細い線のどちらも書くことができた。前時にはらいができたことで、水書用筆で直線や波線などを書くときも、力加減をコントロールしながら書くことができたと考えられる。また、前時では最初に「つ」、後に「ラ」を練習したが、「つ」の曲がりの部分が難しい様子が見られたため、2時間目は曲がりがない字「ン」を最初に練習し、曲がりがある字「し」を後に練習することにした。水書用筆と鉛筆、どちらでも右上へのはらいができた。しかし、「ン」でははらいの傾きが「ソ」のようになった字もあった(図4)。「し」では、はらう直前の曲がりの部分が尖ってしまった(図5)。「し」の曲がりが尖ってしまったため、次に児童が選択した文字「れ」「ん」を練習する際には、「尖っているところ

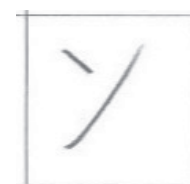


図4



図5

ろを丸くすると、もっといいよ。」と指導すると、「れ」「ん」とともに尖らないで書くことができた(図6)。はらいに意識が向いているとはらう直前で尖ってしまったが、教師が児童のできたところとできていないところを評価し、声掛けをすることで改善が見られた。

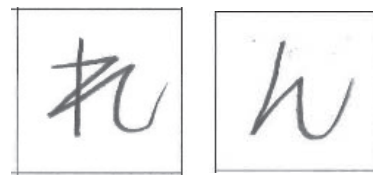
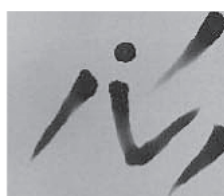


図6

### ③ 3時間目

3時間目は、左はらいと右はらいのある文字を練習した。どの文字も、文字全体が濃く書かれていた。

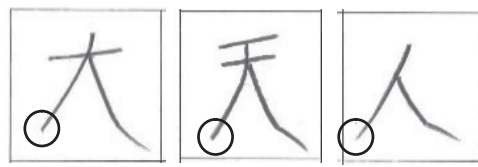
「八」では、水書用筆での練習で右はらいが右上はらいになり「ル」のようになることがあった。児童も「あっ、ちがう。」と言って、「八」ではなく「ル」になったことを自分で気付くことができた。教師が「もっと、下にはらうと上手に書けるよ。」と声を掛けたり、児童が水書用筆で何度か練習したりすると、右はらいができるようになった(図7)。その後に水書用筆で練習した文字は、左はらい、右はらいともにはらうことができた。しかし、鉛筆の練習では、すべての文字で右はらいはできていたが、左はらいができるときとできないときがあった(図8)。また、2時間目までは、はらうときに教師と児童が一緒に、または教師だけが「すう」と声を出していたが、3時間目からは児童だけで「すう」と声を出すようになった。児童自ら、「はらおう」とする意識が見られた。



指導開始時の「八」



図7

図8: 「大」「天」ははらいができていない。  
「人」ははらいができています。

### ④ 4時間目以降

4時間目以降は、はねのある文字を練習した。4時間目に練習した「か」、6時間目に練習した「い」を他の文字と比較すると、文字全体の濃さが少し薄かった。それ以外の文字は、1・2・3時間目と変わらず濃く書かれていた。

また、左上にはねる文字、真上にはねる文字、右上にはねる文字全てにおいてはねることができた(図9)。はねるときには、教師が声を掛けなくても児童一人で「ビョン」と声を出しながら、主体的に書字をしていた。

単元の学習を始めた頃は、児童は自分で書字した文字が正確にはね・はらいができているのか分からない様子が見られたため、教師が「今のはらいはできたね。」「今のはおしかったね。」「正しく書けているよ。」など児童の文字を見て評価しながら声を掛けた。授業が進んでいくと、児童は自分でも分かるようになり、正確に書字できないと「あっ。」「ちがった。」と言ってすぐに書き直すようになった。正確に書字できたときは、「できた!」と言って嬉しそうな表情を見せる場面もあった。児童が適切にはらいができなかったときに自分で気付いて書き直したり、教師の声掛けなしでも一人で声を出しながらはねの練習をしたりする様子から、書字の改善に向けての児童の主体的な言動が見られた。

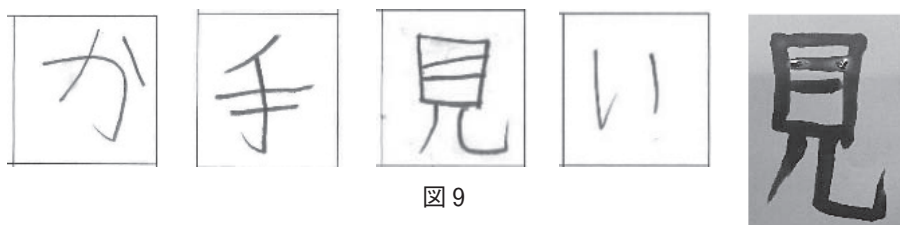


図9

## 5 考察

### (1) 授業の考察

学習内容をスモールステップで配列したことにより、1時間の授業で同じはらい方やはね方を繰り返し練習することができたため、児童は一つずつはらい方やはね方を覚えていった。その結果、ほとんどの文字ではね・はらいができるようになった。また、児童が主体的に「すう」と声を出しながらはらう場面やはらいができたかを判断して練習する場面も見られた。はらいの硬筆練習では、曲がりのある文字で、はらうことに意識が向いたため、字形が崩れる、枠から



はみ出す、曲がりの部分が尖るといった文字になった。スモールステップで学習内容を配列したことにより、時間に余裕がもて、丁寧に教えることができた。また、水書用筆を使用することで、はね・はらい、太線、細線が視覚的に分かりやすかった。はね・はらいの部分が擦れたり、線の太さが徐々に細くなったりするため、書いた直後に「今のはねは違う。」「今のはらいはできた。」と適切に書字できたかを判断しやすかった。そのため、児童自身が、水書用筆で書字した文字を見て、力の入れ方や手の動きの速さなどを試行錯誤し、練習したことで、書字の改善につながったと推測される。

さらに、教師の評価による声掛けによって、児童が主体的に書字を改善する姿が見られた。児童が自分で文字を見て評価できないときは、教師が正しく評価することで、児童も自分の書字を見て評価できるようになり、児童自らが主体的に書字の改善することにつながったと考えられる。

## (2) 調査用紙による結果と考察

1回目（書写の授業前）、2回目（書写の授業後）、3回目（書写の授業1ヶ月後）ごとに児童が調査用紙に硬筆で書字した文字の筆圧とはね・はらいの出来映えを分析した。教師が「はねやはらいに気を付けて書きましょう。」と児童に言ってから調査を行った。

### ① 文字全体の筆圧

文字がカーボン紙に映った枚数を測定した。判定の基準は文字が判読可能であることとした（表1）。また、児童の筆圧を比較するために教師も調査用紙に書字し、枚数を測定した。教師の判定は、5枚または6枚であった。

表1の結果から、書写の授業前に行った1回目と書写の授業後に行った3回目を比較すると、どの文字も3回目の方が枚数が減っていることが分かる。しかし、差が2枚しかない文字もあった（見、い）。また、1回目、2回目、3回目を比較すると、「ラ」は2回目と3回目の筆圧が変わらないが、それ以外の文字は回数を重ねるたびに枚数が減ったという結果になった。また、

3回目の平均（11.7枚）と教師の平均（5.3枚）を比較すると約2倍となり、児童の筆圧が強いことが分かった。以上のことから、ある程度、筆圧が弱まるという結果になったが、筆圧が改善されるところまではいかなかった。

### ② はね・はらいの出来映え

児童が硬筆で書字した文字を観察し、正確にはね・はらいができたかを検証した。検証する文字は、児童が調査用紙に直接書いた文字で行った。

1回目（書写の授業前）は、どの文字もはね・はらいができていなかった。2回目（授業後）は、「ゆ」の2画目のはらいがとめになっていたが、これ以外の文字ははね・はらいができていた。3回目は、「ゆ」の2画目のはらいと「こ」の1画目のはねがとめになっていたが、これ以外の文字ははね・はらいができていた（表2）。

授業前は、すべての文字ではね・はらいができなかったが、授業と毎日の水書用筆の練習により、ほとんどの文字で正確にはね・はらいの改善が見られた。授業では、「大」の左はらいができなかったが、調査の2、3回目では、はらえるようになった。授業だけでは身に付かなかったが、毎日の水書用筆の練習によって改善された。また、毎日の練習は5～10分と短かったため、児童は水書用筆で書くことを嫌がらず、楽しみながら続けることができた。書写の授業後にほとんどの文字で書字の改善が見られたのは、毎日の水書用筆の使用によって、はね・はらいの感覚を忘れることなく練習できたからだと考えられる。

表1 カーボン紙に写った枚数

用紙に書字した順番	文字	1回目	2回目	3回目
1	つ	15枚	6枚	5枚
2	ラ	15枚	8枚	8枚
3	し	15枚	11枚	8枚
4	シ	16枚	11枚	9枚
5	大	15枚	13枚	11枚
6	水	16枚	12枚	11枚
7	ゆ	15枚	11枚	9枚
8	か	15枚	13枚	11枚
9	オ	15枚	14枚	11枚
10	見	15枚	14枚	13枚
11	九	15枚	14枚	10枚
12	こ	15枚	13枚	11枚
13	い	15枚	14枚	13枚
平均枚数		15.1	11.8	11.7

表2 1回目, 2回目, 3回目を比較した文字 (一部抜粋)

1回目 (書写の授業前)	フ	し	大	ゆ	こ
2回目 (書写の授業後)	フ	し	大	ゆ	こ
3回目 (書写の授業1ヶ月後)	フ	し	大	ゆ	こ

## 6 成果と課題

### (1) 成果

筆圧が強い児童において、水書用筆を使用した書字指導は、はね・はらいを改善することができたため有効であった。また、スモールステップでの適切な学習内容の配列や授業中の教師の声掛け、毎日の水書用筆を使用した練習も書字改善につながった。さらに、児童が主体的に書字を改善する様子も見られた。

### (2) 課題

書写の時間やカーボン紙の検証では、はね・はらいの改善が見られたが、普段の授業や書字する場面を観察すると定着したとは言い切れない。もちろん、正確に書字できる文字は増えてきたが、はね・はらいができない場面も見られる。また、筆圧に関しても、力を入れないで書字しているときもあるが、長くは続かず文字が濃くなることが多い。本研究は、3か月と短い期間だったため日常的な書字の改善までは至らなかったが、長期間に渡って水書用筆を使用することでさらに筆圧のコントロールが可能になるかもしれない。児童が疲れずに正確な文字を書字することができるように、筆者自身が学ぶ姿勢を忘れずに努力していく。

## 参考文献

- 1) 小林比出代, 小池勲, 押木秀樹 (2016) 「学習初期段階における書字動作の学習と学習用筆記具の効果－平仮名の学習における磁石筆の有効性－」 全国大学書写書道教育学会 『書写書道教育研究第30号』 p.10
- 2) 教育出版 小学 書写 1年
- 3) 市ノ瀬友香 (2021) 「毛筆学習が左利き者の硬筆書字に与える効果－カーボン紙を用いた筆圧と字形の調査を通して－」 信州大学国語教育学会 『信州国語教育巻30』 p.82を参照
- 4) 教育書籍 あたらしいこくご 一下